



写真:小寺一路

「いちばんかぐら」 壹番神楽



幣と扇を持った舞人が登場して舞う直面の採物神楽である。四人で舞う厳粛なもので、東方の句々廻馳の神(木の神)、南方の軻遇突智の神(火の神)、西方の金山彦の神(金の神)、北方の罔象女の神(水の神)及び中央の埴山(安)姫の神(土の神)の五行神を拝み奉る舞いである。大麻舞、米撒神楽、撒米神楽、折居神楽、御福神楽、四人神楽、御福、小神楽とも呼ばれる。

「たみさかぐら」 手総神楽



最初は幣と扇を持って舞い、続いて二束の笹に持ちかえて舞う直面の採物神楽である。壹番神楽と同じ目的であるが、これは執物に笹を使用して神楽拝殿及び四方を祓い清める優雅な一人舞いの神楽である。笹や櫛などは、神への採物として、また露払いの目的で古くから用いられていたようである。笹を振ると「サラサラ」と音を立てるが、この音は神の囁きと考えられている。また、笹によりすべての禍、罪穢を祓ぎ払う悪魔祓いの舞とも言われている。手草神楽、手笹神楽、笹神楽、手房神楽とも呼ばれる。

「みさきかぐら」 駈仙神楽



古事記や日本書紀で知られる天孫降臨、すなわち天津神である邇邇芸命の使者である天鈿女乃命(幣方)と国津神たる猿田彦乃命(鬼)が天の八衢で出会った場面を神楽にしたものであり、猿田彦乃命は天孫の道案内としての役を担うと言われていた。御先神楽、神宣舞い上げ、注連切、二ノ切、舞上、返拜とも呼ばれる。

「ゆみしょうごかぐら」 弓征護神楽



神楽拝殿を祓い清める目的で舞う四人舞いの直面の採物神楽である。装束は毛頭、千早姿で、手に弓矢を持って軽快なリズムに乗って舞う神楽である。成弦とは、白木の弓の弦を鳴らすことによって、目に見えぬ矢で目に見えぬ世界の物怪を射ることである。弓矢を四方(東、西、南、北)及び中央に向けて射るのは、各方位の邪神(悪魔神)を祓い除ける魔除けの意味を持っている。弓正号、弓正護、弓証護とも呼ばれる。

「ちわりかぐら」 地割神楽



地割神楽は、東方太郎(東)、南方二郎(南)、西方三郎(西)、北方四郎(北)、中央太郎(中央)及び神宣の六人が登場する直面の採物神楽である。五行では、東は春、南は夏、西は秋、北は冬、中央は土用の季節にそれぞれ配属される。すなわち、地割神楽は、春夏秋冬の順調な輪廻・循環を促して、五穀豊穰、天下泰平等を祈願することを主な目的として行われる。五行、五業とも呼ばれる。

「いわとびらき」 岩戸開



須佐之男命の横暴に立腹した天照大御神が天の岩倉に姿を隠したため、日本は常闇になって至る所で禍が生じるようになった。このため、八百万の神々が天の安天原に集まって天照大御神を天の岩倉から出すことについて協議した。そこで、知恵者の思兼の指示により天照大御神を天の岩倉から出すため岩戸の前で舞うのがこの岩戸開である。天照大御神が再び姿を現したため高天原も、葦原中国も自然に以前のように明るく照り輝くように、世の中が平穏になったとする記紀に基づいたストーリーであり、この様子を神楽化したのが、この岩戸神楽といわれている。岩戸前、岩戸神楽、戸前とも呼ばれる。